けんせつのでんせつ シリーズ77

釜鳴り

はじめに

今から約100年前の大正12年（1923）9月1日。東京を中心に10万5千人もの犠牲者を出した大地震が起きました。後に関東大震災と呼ばれたこの大災害は、お昼時だったことから火災により被害が大きくなりました。もし、予知できていたら人々は火気を使用せず、被害を最小限に食い止めていたかもしれません。

それから100年経った現在でも地震予知は実現してはいませんが、関東大震災からさらに約70年前の安政2年（1855）10月2日に、同じく江戸を襲った直下型地震「安政江戸地震」の際には、自宅で起こった「釜鳴り」によって地震を察知した人物がいたといいます。

『大預言者の秘密』の話

昭和54年（1979）に刊行された高木彬光氏の『大預言者の秘密 易聖・高島嘉右衛門の生涯』には、次のようにあります。（高島嘉右衛門については、この連載の2020冬号にて紹介しており、当館のホームページからご覧いただけます）

それは安政2年9月末のことでした。

「ずいぶんなまずがおかずに出るな。昨日もなまず、今日もなまず、この十日ほどなまずが続いた」

夕食の食膳にむかって嘉兵衛（嘉右衛門の旧名）は眉をひそめた。

「魚屋さんの話では、江戸付近では手づかみにしたいほどとれる。この調子では犬でさえ食わなくなるのではないかということでございます」

嘉兵衛はとたんに箸をとめ、無限の彼方を見つめるような表情となった。

「なまずのことなのだが、大きな地震の発生前には、大地そのものに人間にはわからぬかすかな動きがあるのかもしれぬ。それを感じて動き出す。こう考えれば、たしかに理屈はわかるのだが、何としてもふしぎな話だな」

「ふしぎといえば、この家でもふしぎなことがあったのでございます」

「今日のお昼ごろでございましたが、お台所の釜が自然に鳴り出しました。何も入れてはおりませんし、火にもかけてはおりませんでしたのに…ふしぎな音を発しまして、半刻ばかり鳴り続けました。」

「うむ、釜鳴りか」

古来、「釜鳴り」は吉凶を問わず、変事が起こる前触れだと考えられていたため、嘉右衛門は得意の易を試みました。すると、「火」の形が現れたので、近いうちに大地震が起こり、江戸が大火になるのでは、と察して大勝負に出ます。それは、大火後の高騰を見越し、木材をできる限り買い占めてしまうというものでした。果たして嘉右衛門の予感は的中し、大金を手にしたのです。

壮年の高島嘉右衛門
（出典:『呑象 高嶋嘉右衛門翁傳』）

『高島翁言行録』の話

この話の典拠となったのは、明治41年（1908）に出版された聞書き『高島翁言行録』などで、次のように書かれています。

安政2年9月末頃のある日、嘉右衛門が帰宅すると往来の掃除をしていた弟の徳右衛門が、「今日我家に不思議の事あり」と話しだした。

「我家の釜不思議にも釜の下に一片の火を存せざるもの烈しく鳴動し近隣にも聞へて人々の怪む程なり」

そうして先の話と同じく易で占うことになるのです。

元総理の家の釜鳴り

ここでもう一人、釜鳴りのエピソードを持つ人物をご紹介しましょう。第67代内閣総理大臣を務めた福田赳夫氏の伝記小説『小説福田赳夫』には、第一高等学校（現在の東大教養学部などの前身）に合格したときのことが記されています。それは合格発表の日のことでした。

福田元総理の「両親や兄夫婦たちも、合格の電報を受ける前に、〝合格したかもしれない〟と事前に察していたという。当時、福田家の台所のカマ（釜）が、なにかよいことがあるときまったようにビョウビョウと大きな音を立てた。いわゆる〝釜鳴り〟である。この〝釜鳴り〟は、福田家の人たちの話によると、彼（福田元総理）に関してだけでも、東大入学、高文合格、大蔵省入り、英仏駐留、南京政府顧問、官房長、銀行、主計両局長就任のときも鳴りつづけ、かなり離れた近所まで聞こえたという。」

鳥山石燕
『百器徒然草』 鳴釜
（川崎市市民ミュージアム 所蔵）

吉備津の釜

しかし、実際に釜が鳴ることなどあるのでしょうか。ここで、思い起こすのが、岡山市にある吉備津神社で現在も行われている鳴釜神事です。神社のホームページによりますと「釜に水をはり湯を沸かし釜の上にはセイロがのせてあり、常にそのセイロからは湯気があがっています。（中略）セイロの中で器にいれた玄米を振ります。そうすると鬼の唸るような音が鳴り響き、祝詞奏上し終わるころには音が」止むとあります。

釜が鳴る仕組み

四天王寺大学准教授檀上慎二氏は、過去にNHK番組「やってみよう何でも実験」の依頼によって、この現象を解明しています。

それによると、釜が鳴る原理は「熱音響自励振動」という物理現象で、ある状況下で管状の容器を熱すると温度分布と圧力分布が生まれ、容器内の空気が熱機関として働き、振動が励起されて大きな音が鳴る…と詳しくは述べませんが、つまり、釜の上に筒状のセイロをのせ、そこに米などを入れ、火にかけることが釜を鳴らすための条件となります。

吉備津神社
（岡山県岡山市　2018年撮影）

鳴釜神事が執り行われる吉備津神社の御釜殿
（2018年撮影）

共通項は〝赤飯〟

しかし、福田家の釜はわかりませんが、高島家では一切火にかけていないと書かれていました。もしかすると『高島翁言行録』の記述には、誤りがあるのではないか。そこで、『高島翁言行録』以前に書かれた高島嘉右衛門の伝記を調べてみました。

嘉右衛門の伝記は、彼が40代後半の明治13年（1880）には出版されており、当時は釜鳴りなどの具体的なことは書かれておらず、ただ「豫め其兆を察し」とだけありました。

ところが、明治26年（1893）に博交館から出版された『東洋実業家詳伝 第2編』では、同じ場面で『高島翁言行録』とは異なる釜鳴り現象が書かれていたのです。

それによると、「「安政二乙卯年九月十五日家例（毎月朔日、十五日、二十八日に小豆飯を焚くを例とす）に依り小豆飯を焚きしに釜忽焉として鳴を生じ暫くして止まず…」とあり、9月15日に高島家定例の赤飯が焚かれ、その際に釜が鳴ったと具体的に書かれています。おそらく、釜鳴りのエピソードに限ってはこちらが真実に近いのでしょう。

赤飯といえば、福田家の釜鳴りは慶事に鳴るとされていました。福田家でも高島家同様に釜鳴りは、大学の合格などの際、赤飯を焚いた折に「熱音響自励振動」が起きて釜が鳴ったのでないでしょうか。まあ、これは完全に推測ですが、ありえない話ではないと考えています。

記述の変遷

高島嘉右衛門の釜鳴りの話について、伝記からその変遷をたどってみましたが、かなり大胆に変化していることがわかりました。明治26年の『東洋実業家詳伝 第2編』では、おそらくは本人からの聞き取りどおりに書かれたのでしょう。

明治41年の『高島翁言行録』になると、火もないところで釜が鳴るという、より不思議な話になっています。おそらく、その頃には、嘉右衛門は易の大家として名が知られていたので、このような話に改められたのではないでしょうか。そして、高木彬光氏の小説『大預言者の秘密』では、なまずのエピソードも加えられ、嘉右衛門が大地震を察知した理由を読者にわかりやすいように仕立てられているのです。

おわりに

しかし、いままで述べてきたことを覆すようですが、「熱音響自励振動」ではない釜鳴り現象も報告されているので最後にご紹介しましょう。滋賀民俗学会の機関誌『民俗文化』第589号に掲載された長谷川博美氏の投稿「妖怪釜鳴り」は、昭和44年（1969）、長谷川氏が12歳の頃に自宅で起こった釜鳴り現象の報告です。

「まず家族が外出した静かな居間にいた筆者は、小さな共鳴音が『シーン』と聞こえるので、耳鳴りかと思ったが、共鳴音はさらに高まり『ウワーン』とさらに高く響いた、炊事場のガス釜の方から聞こえてきたので、ガス管から漏れているものと思い、ガス栓を確認に炊事場に向い、ガス釜に近づくと共鳴音は静かに停止した」と当時の様子が詳細に書かれています。

また、ガス釜は一切加熱をしておらず、薄いホーロー製で、内釜から約5㎜空間がある二重構造をもち、外釜は共鳴の条件となる真円（真球?）に近く、これは共鳴現象だと思ったと述べられています。

長谷川氏の釜は、二重構造のガス釜であり、高島家の釜とは条件が違うのですが、加熱をせずに「釜鳴り」が起こることもあるようだと、一応触れておきたいと思います。

（文：江口知秀）